星槎大学紀要（Seisa Univ. Res. Bul.）共生科学研究 No.18　49～52（2022）

特集　宮澤名誉会長と星槎と私

追想録

坂　田　映　子

1．はじめに

宮澤名誉会長の国際交流への行動の斬新さ、それに注ぐエネルギーの大きさ、徹底した完遂を求める熱意には、その背後にある、いわば国際協調の意志ともいうべき計画の構想力と直観力にいつも驚嘆させられた一人である。

宮澤名誉会長（以後、会長と呼称）の発想力は、国際的とか、地球的とかいうものでなく、強いていうなら、宇宙的と表したらよいのではないかと常々思っていた。この宇宙の中で、地球が生まれ、生命がつくられ、その中から人間が姿をあらわし、文化を創造してきた。その悠遠な流れに身を置き、一瞬の直感力で実行に移していく。会長の心の底には常に、その原動力となる強い情熱が溢れていたのではないだろうか。

はじめての会談の冒頭、「坂田さんは、僕に年が近いんだよな」と笑顔で語られたが、その後は、ブータン王国（以下、ブータンと呼称）との交流について、王族の方々との出会いや国王ジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク陛下との交流、実際の支援状況を説明された。時折、自身の戦後の幼少時代を振り返りながら、遥かブータンに思いを馳せ、「もう、そろそろ、ブータンの短期留学生を京都へ連れていきたい。やっぱり京都なんだよ」と呟やかれた。“日本人とは、何だろう”と常にその文化の源流を考えていられたように思えた。幼い頃への郷愁とブータンへの思いは、時を越え、まるで禅的思考のようであり、「絶対の世界」に存在していたのではないかと、今さながらに思い出される。留学生に京都の伝統文化を見せたかったのは、日本文化がもつ独自性とその価値、美への回帰を求めていたのではなかったのだろうか。

2 回目以降の会談では、「カノン」（パッヘルベル作曲）や「ミサ曲」（カッチーニ作曲）にも及んだ。美しい和声に魅せられた学生時代を懐かしみ、常に異文化の中の融合体として、過去と現在を繋ぐ「ハイブリッド・カルチャー」になっていった。ハルモニアに憧れ、美を求めようとする姿には、学校に行かない・行けない子供たちのための学校をつくろうとするヒューマニズムと同時に、生き方の美学すら感じられた。

一方、大学院への思い入れも、並々ならぬものがあった。社会人である現職教員が入学してくる大学院生に対し、「共感的理解教育」の深淵を述べられ、現場の先生方の実践を何とか形にしてやれないものかと語った。他大学のやり方とは違った、共生の理念に基づいた星槎独自の院生の学びに、自身の大学院生時代を重ね、豁然としたイメージを持たれていた。

会長とは、2018 年から 2022 年に渡り、年数回の会談に参加させて頂いたが、その記憶を辿り、我々に託された共生という教育思想を、追悼の意を込めて述べてみたい。

星槎大学共生科学部、大学院教育学研究科

2. ブータンが教えるもの

初めて、RTC（ロイヤルティンプーカレッジ）の短期留学者の引率業務に関わったのは、2020年の1月であった。主に、鎌倉高徳院・建長寺等への引率やフェアウェルパーティの企画・参画であった。

建長寺参拝は凍えるようで、折からの霙が、一層体を冷たくした。RTCの学生は、寒さを苦にすることなく、客殿の板の間に額を擦りつけては祈り続け、女子学生の「もう少し祈りの時間が欲しい」と懇願する言葉に、信仰心の厚さを窺い知ることができた。建長寺は、禅宗の源流を持ち、自他の救済をめざす大乗仏教の一つである。学生たちは、訪日前からプログラムにある建長寺について学んでいたのであり、「空虚な身で出かけ、充実して帰り」がモットーであるかのようだった。

2-1　仏教と舞踏

星槎とブータンには「共に生きる世界の実現」という共通の目標が掲げられており、その一つが祈りであったと考えられる。チベット仏教は日本と同じく、菩薩信仰が強い。「現世で信仰心を持ち、人に施し徳を積むことが、来世の自己を助ける」という思想が、学生一人一人の生き方に根強く育まれていた。信仰は、既に共生の理念を醸成していることを、学生の地蔵菩薩への芒洋とした眼差しから垣間見ることができた。

フェアウェルパーティでは、学生たちの舞踏が紹介された。『Tharingsa（遠いところ）』（ブータンの「うた」）は、実に牧歌的であり、仲良く手を取り合い、踊る姿は日本の盆踊りのようでもあった。民俗音楽には、農耕労働、収穫の喜びを表現するという普遍性がある。「うた」や舞踏は、それらの喜びを表現する祝いごとには欠かせない共生の要素であることを、舞踏を通して伝えてくれたのである。

会長は、学生たちにチョコレートをプレゼントしながら、和気あいあいと歓談した。「これが共に生きることなんだよ。難しい話はいらない。こんなにいいことをしているのになかなか理解されないんだよな」とぽつんと呟いた。このような海外交流には賛否が付きまとう。実施プログラムは尊い内容であり、インパクト調査でも、評価の高いものであったが、付きまとう消滅変化に惑わされない堅固な世界理解、ブータン理解は、十分ではなかったかもしれない。その後の、RTC受け入れSTARプログラムは、「京都探訪」を視野に入れ準備したものの、折からの新型コロナウイルス感染パンデミックにより、国際交流センターは、ブータン渡航も、RTCの短期留学生を迎えることもできないまま過ぎていった。2021年6月、会長は、電話で「僕の調子のよい時にブータンへ、ワンチョク国王に会いに行こう。こういう仕事は、とても大事なことだ」と話された。だが、叶うことなく、2022年3月、無限の世界、黄泉の国へ旅立たれた。

2-2 「声明」と中村氏との出会い

「声明を調べるなら、中村さんに会うといい」そのようなメールが飛び込んできた。すぐ大磯へ向かい、中村光也氏[1)]にお目にかかる。中村氏は、声明は、今やブータンでは、情報化の波に浸食され、風前の灯火であるという。

ブータン声明は、チベット声明ともいわれ、お経の合唱そのものである。山岳地帯の高い山の静寂な環境で歌われる声明は、低音のドローンのような節と響きを持ち、倍音が聴こえる世界でたった１つの声明である。中村氏は、情報科学と声明のような伝統文化は、本質的に相容れないと語った。「ブータンの無形文化財保護のために尽力したい」と会長と同じ主張を述べた。会長の友人であり、星槎大学の客員教授でもある大橋勉氏[2)] もまた、同じ考えをもっていることを後になって知ることになり、研究同人は４人になった。

その後、「情報化社会と伝統文化は共生できないものか」という疑問が首を擡（もた）げてきた。無形文化遺産として世界的に有名な声明の価値を、ブータン市民や教育を受ける子供たちが理解するようになれば、情報化社会と伝統文化の声明は、共生・共存に向けて歩み寄れるという仮説が容易に成り立った。この後の展開は、研究ノート「ブータンの情報化と伝統文化との共生―民族音楽を手掛かりとして―」（2022, 星槎大学教職研究第７巻）にまとめている。

3. ミャンマー支援

「僕は、50 回は訪緬した。坂田さんは何回行ってるか」2017 年、初めての訪問した SEISA Africa Asia bridge で、そのような質問を頂いた。当時、「JICA　Contractor として計 24 回訪緬していること、ミャンマー初等教育カリキュラム作成と教員養成が主な仕事であること、2012 年からヤンキン教育大学と日本を往復している」と答えたことを覚えている。驚いたことに、同時期、会長は、医療支援のための救急車や石鹸などを寄付していたのである。当時、各大学のミャンマー支援といえば、4、5 日ほど滞在し、レポートし、写真を撮っては、さっさと引き上げる例が多く、ミャンマー人は有難迷惑に思っていた。だが、会長は違った。

２年の間に 10 回訪面し、手術機器・救急車２台・およそ 15,000 個以上の石鹸を贈り、小学校に衛生週間を設けるなど、医療と教育に対する支援を行っていたのである。これは、『必要なところに私は行く－そして必要なことをする』（宮澤，2018）で詳細に述べられている。手術機器は、贈っただけでなく、医師が同行し、白内障手術を行ったという MTV 国営放送でニュースが流れたことを、後に、現地ヤンゴンで、驚きをもって聞くことになった。交流は、オリンピック・パラリンピックにも及び、快挙にいとまがなかった。

当時のミャンマーは、テインセイン大統領の軍事政権下であり、一般市民は貧しく雨季には、不衛生さも手伝って感染症になる人々が多かった。筆者も、シャワーの水が口に入っただけですぐ腹痛を起こした。カビの生えたヤンキン教育大学の一室で仕事を続けたものであった。手を洗う習慣のないミャンマー人が多く、洗面所には石鹸やしゃぼんはなかったのだから、子どもたちへの星槎からの寄付は、国の保健衛生に貢献したといっても過言ではない。2019 年には、ホテルの濁り水は浄化イオン水となり、ミャンマー市民の衛生環境は、見る見るうちに改善し、「ミャンマープラザ」や「シティマーケット」には、「タナカ」という石鹸や欧米の液体石鹸が出回り、暮らしは進化した。スーチー政権により、市民生活に民主主義も行き渡り、いよいよ活気に漲っていた。

2021 年１月、最後のフェーズ、教員養成カリキュラムテキスト作成のため、ズームでヤンキンプロジェクトオフィスと連絡を取り合っていた頃だった。同年２月クーデターが起き、

インターネットはすべてが遮断された。国境なき医師団で活躍していた医師たちもまた、医療体制は壊滅的だと伝えてきた。会長は、「ひどいなあ」と絶句した。

2021年度、SAABでのミャンマー学生の参加について、日本との交流に軍の弾圧があれば、彼らに迷惑が及ぶという見解から見合わせることにしたのだが、「僕ならやるよ」と一喝された。何という勇気と冒険心か。こういう非常時だからこそ、仲間との交流は継続するべきであり、これが会長の求める慈悲であり共生であることを確信したのである。

「一つの正義で図らず、多様な価値に身を置いて、複雑さに耐えて、ことを進める」。これは、個人にとっても、国同士にとっても、心に止めなくてはならない永遠の真理であることを示されたと心から感謝している。

4. おわりに

新型コロナ感染症パンデミックは、多くの国々を内向きにした。情報の現代化は進んだものの、負の部分が諸外国を覆うようになった。幸か不幸か、この間、共生を考える時間を得ることができた。辿り着いた先は、共生は「調和」であるという結論である。宇宙も自然界も人間の暮らしも、もともと多様化していたのであり、みな同じでなければならないという法則はなかった。それぞれの環境の中で、調和し合うことが共生であったはずである。

服部（2020）は、アリストテレスの「霊魂論」の構造から、「人間のアニマの中には、動物的なアニマも包含され、動物のアニマの中には植物的なアニマも現存する。いのちは連続している。（中略）循環するいのちを表している」と述べている。ここに共生のすべてがあるように考えられはしまいか。

会長が語る「目の前にいる困っている人に、手を差し伸べることからすべては始まる」という仏教的「和合」の精神も、「グレゴリアンチャント」に繋がるハルモニアの「カノン」の美学もすべて調和であり、共生である。星槎の国際交流で、国を越え、政治を超越し、ブータン・エリトリア・ミャンマー支援を継続してきた所以の真意もここにあるといえよう。

最後に、会長から学んだことは、「思考は、合理的経験だけで成り立っているものでなく、感覚的経験こそが思考にリアリティを与える、その感覚を包み込まない思考は、実は底の浅いものである」という示唆である。「どこかおかしい」「どこか変だ」と感じることこそ、個人や世界が真っ当に成り立っていくために必要な感覚であるということだ。

会長が残された共生思想には、こうした生気ある感性を拠り所とし、深い慈悲と恵みと万物との調和によって成り立つことは、あまりに自明である。

補　注

1）中村光也（2019）「幸せの国からの聲」vol, 1. 実行委員会, pp.1-8

2）大橋勉、星槎大学客員教授、文明科学研究所所長、芸能「山城組」主催

引用文献

宮澤保夫（2018）.「必要なところに私は行く－そして必要なことをする」. 丸善雄松堂.

服部英二（2020）.「地球倫理への旅路－力の文明から命の文明へ」. 北海道大学出版会. pp.120-125.